荻、

〔新撰字鏡草〕荻邁同、徒歷反、蘆荻也、乎支、

〔倭名類聚抄二十草〕荻　野王案云、荻音狄、字亦作邁、和名乎岐、與亂相似而非一種矣、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按本草圖經云、爾雅謂茭爲亂、或謂之荻、荻至秋堅成、卽謂之萑、補筆談云、亂萑茭荻也、皆以亂荻爲一物、顧氏相似非一種之說、未知所本、

〔書言字考節用集六生植〕荻蘆之屬、事詳本草、烏蓋同　茭同　亂同　萑同　邁同　蒹同

〔東雅十五草卉〕荻ヲギ　倭名鈔に野王の說を引て、荻はヲギ、與亂相似而非一種と註せり、本草圖經の如きは、茭は亂似葦而小、中實、或謂之邁、卽荻也、至秋堅成、乃これを萑といふ、蒹は似萑而細長、高數尺、其花其萌を呼ぶ事は、葦も荻も相同じと見えたり、さらば亂と荻とは一物にして、葦とは別にこれ一物也、ヲキといひしは、スヽキに對し云ひし所と見えて、オとは大也、キといふは其芒あるを云ひしと見えたり、卽今俗にはウミガヤなどいふ是也、兼は卽今俗にスダレアシなどいふなり、むかし日向の國人の云ひし事を聞しに、彼國には猶今もウガヤといふ者のあるなり、これは葦不合尊の御產屋をふきし者也と云ひつぎぬといひけり、ウガヤといひ、ウミガヤといふ、其語相通じぬれば、太古の時にウガヤといひし物は、荻なりけむも知らず、

〔藻鹽草八草〕荻野などにもあるべし云々、

したおき、荻原、荻のやけはら、庭荻、から荻、かれた荻の上風、荻のは風、そよぐとも、またなびくともよめり、〇中略荻の花万也、但猶以可尋歟、ともすりのをとのはげしさと讀り、葉風にそへて云り、新六、たかやかなる荻といへり、寺也、源氏、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕蘆

荻　ヲギ、ヲギヨシトモ云フ、古歌ニハフミミグサ、ヤマシタグサ、カゼキヽグサ、トハレグサ、子カラグサ、ノモリグサ、メザマシグサ、ツユヤグサ、子サメグサ、カゼモチグサト云、水邊ニ生ズ、陸地ニ移シテ繁殖シヤスシ、大抵菅茅ニ似テ長大ナリ、其莖蘆トハチガヒ、肉厚クシテ中ニ小孔アリ、花